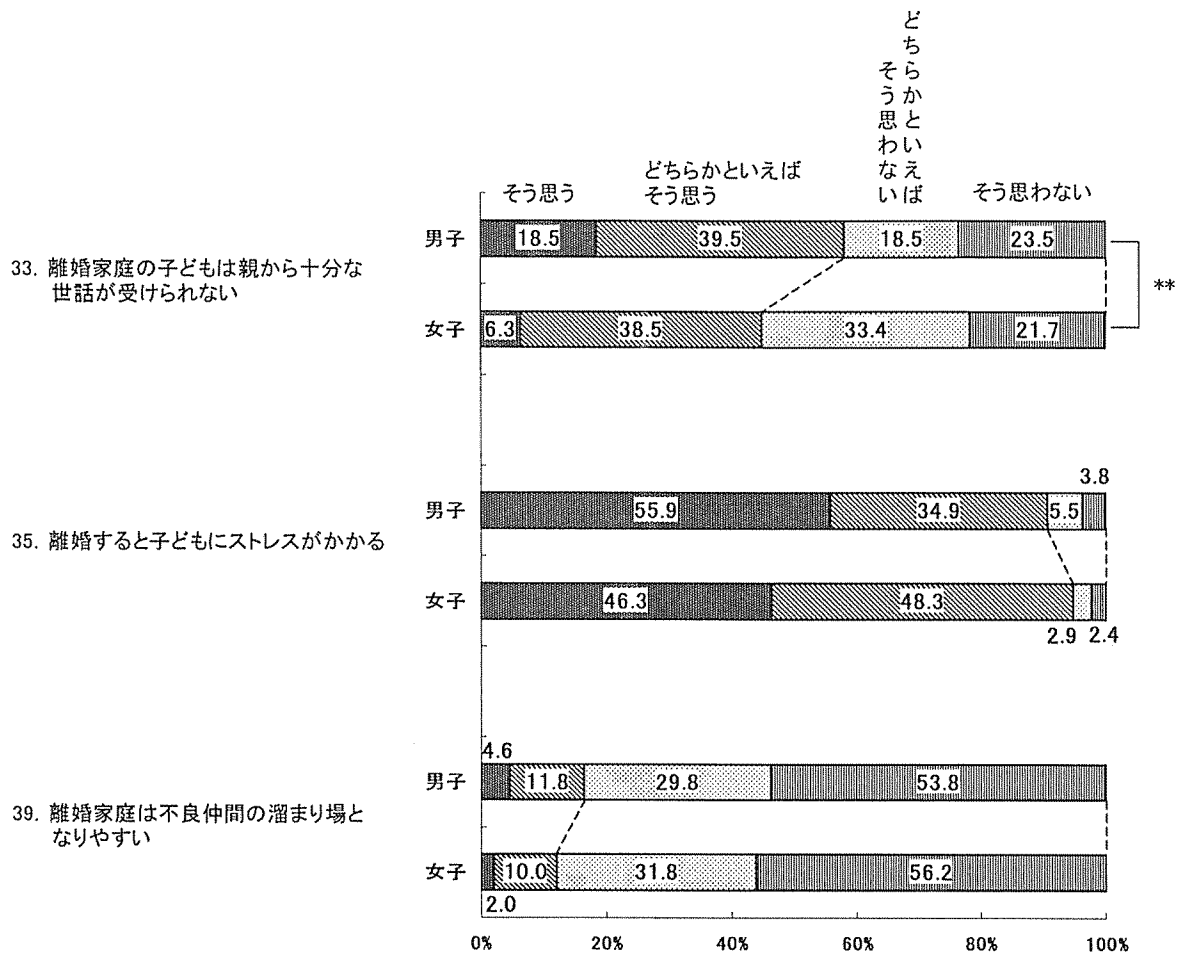


図表 2.4c 男女別に見た離婚家庭の子どもに対する考え(Q2)(続き)



図表 2.4 にみられるように、男子は女子に比べると、「子どもには、両親がそろっていることが必要」、「離婚家庭の子どもは、片親で可愛そう」、「離婚家庭の子どもは、親から十分な世話が受けられない」と強く感じており、離婚家庭の子どもは、「非行化しやすい」、「生活が乱れる」、「学校で問題を起こす」と認識していた。つまり、男子の方が女子よりも、離婚家庭の子どもは親から十分な配慮と世話が受けられずに気の毒であり、反社会的な問題を起こしやすいと捉えていた。

## 2. 離婚に対する意識の構造

### (1) 因子分析による離婚に対する意識の構造の検討

離婚に対する意識の構造を明らかにするために、離婚に対する考え・離婚する原因・離婚家庭の子どもに対する考えのすべてを合わせた全項目に対して因子分析（主成分解、バリマックス回転）を行った。それぞれの質問項目に対する回答は、「そう思う」を4点、「どちらかといえばそう思う」を3点、「どちらかといえばそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点と得点化された。

固有値 1 以上の因子について、バリマックス回転を行った結果、5 因子が抽出された。各因子の寄与率（回転後）は、第 1 因子から順に、11.3%、9.9%、7.1%、5.6%、5.1%であり、累積寄与率は、38.9%であった。因子分析の結果を図表 2.5 に示す。

図表 2.5 離婚に対する意識の因子分析の結果

項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5
<i>離婚する親への否定的イメージ</i>					
Q2.6 子どもがいるのに離婚するのは、親の身勝手である	.72	.06	.02	-.08	-.03
Q2.17 離婚だけは、どんなことがあっても避けたい	.68	.13	.19	.07	-.19
Q2.16 子どもには、両親がそろっていることが必要である	.63	.24	.01	.18	-.12
Q2.28 子どもが成人になるまでは、離婚しないほうがいい	.54	.26	.11	.13	-.04
Q2.9 離婚するくらいなら、結婚しなければいい	.53	-.04	.18	-.14	.19
Q2.18 離婚する人は、子どもへの愛情が少ない人である	.53	.15	.28	-.17	-.10
Q2.2 離婚家庭の子どもは、片親で可愛そう	.51	.39	.06	.16	-.08
Q2.31 安易な気持ちで結婚する人が、離婚するのだろう	.50	.22	.01	-.15	.23
Q2.11 我慢できない人が、離婚するのだろう	.49	.10	.13	-.03	.33
Q2.34 妻や子どもに対して無責任な男性が、離婚するのだろう	.48	.23	.07	.11	.27
Q2.36 性格的に問題のある人が、離婚するのだろう	.43	.28	.14	-.06	.20
<i>離婚家庭の子どもへの否定的イメージ</i>					
Q2.30 離婚家庭の子どもは、学校で問題を起こしやすい	.07	.75	.21	-.06	.10
Q2.26 離婚家庭の子どもは、生活が乱れやすい	.16	.74	.06	.06	-.03
Q2.14 離婚家庭の子どもは、非行化しやすい	.17	.70	.09	.04	-.01
Q2.33 離婚家庭の子どもは、親から十分な世話が受けられない	.24	.62	.02	-.06	-.02
Q2.39 離婚家庭は、不良仲間のたまり場になりやすい	.02	.58	.19	-.09	.21
Q2.32 離婚家庭の人に、どのように接してよいかわからない	.03	.42	.30	.05	.08
<i>離婚に対する否定的評価</i>					
Q2.29 自分の身内で離婚者がいても、周囲には言いたくない	.19	.34	.53	.03	-.03
Q2.4 離婚すると、交友範囲が狭くなる	.12	.27	.51	.09	.03
Q2.38 離婚した人は、人生の敗北者である	.13	.19	.50	-.34	.08
Q2.23 できれば離婚家庭の人とは、付き合いたくない	.18	.24	.48	.04	.03
Q2.21 離婚は、恥しいことである	.35	.26	.47	-.17	.02
Q2.25 もし自分が離婚したら、人には言いたくない	.19	.37	.46	.08	-.02
Q2.8 離婚すると社会的信用を失う	.28	.23	.42	.09	.08
Q2.13 離婚したら、周囲から同情の目で見られるだろう	-.08	.23	.40	.31	-.03
<i>離婚による人間的成長</i>					
Q2.20 離婚家庭の子どもは、同年齢の子どもと比べて自立しているだろう	.15	.03	.10	.65	.08
Q2.27 離婚することで、人間的に成長する面があるだろう	-.22	-.12	-.20	.58	.09
Q2.7 離婚家庭の子どもは、親思いであろう	.17	-.05	.28	.54	.13
Q2.15 離婚は、人生の再出発である	-.32	.02	-.15	.46	.22
Q2.19 離婚家庭の親は、ひとりで両親の役割をにない苦勞しているだろう	.32	.25	-.18	.43	.01
<i>女性の経済的自立による離婚増加</i>					
Q2.40 女性が自立したので、離婚が増えているのだろう	-.02	.05	-.05	.10	.79
Q2.10 女性が経済力を身につけたので、離婚が増加しているのだろう	-.06	.02	.07	.06	.78
Q2.22 子どもに両親の絶え間ない喧嘩を見せるより、離婚したほうがよい	-.14	.08	-.33	.09	.34
Q2.37 離婚すると女性のほうが、男性よりも苦勞するだろう	.18	.09	-.01	.30	.26
Q2.3 今の世の中、離婚はよくあることである	-.01	-.07	-.25	.08	.22
Q2.12 離婚して幸せになれるのなら、離婚してもよいと思う	-.30	.03	-.30	.30	.19
Q2.24 離婚した人に同情するのは、良くない	.04	.00	-.12	.26	.06
Q2.5 離婚は、自分には関係ないことだと思う	.31	-.03	.24	.07	.01
Q2.1 離婚家庭は、経済的に苦しいだろう	.20	.32	-.12	.08	.01
Q2.35 離婚すると、子どもにストレスがかかる	.30	.36	-.37	.17	-.04
因子負荷量の2乗和	4.58	3.95	2.83	2.23	2.03
因子の寄与率(%)	11.30	9.87	7.07	5.57	5.08

第1因子は、「子どもがいるのに離婚するのは、親の身勝手である」、「離婚する人は、子どもへの愛情が少ない人である」、「安易な気持ちで結婚する人が、離婚するのだろう」など、離婚の当事者である両親に対する批判的な感情が示されているので、『離婚する親への否定的イメージ』と命名した。第2因子は、離婚家庭の子どもは、「学校で問題を起こしやすい」、「生活が乱れやすい」、「非行化しやすい」など、離婚家庭の子どもに対する好ましくない印象が示されているので、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』と命名した。第3因子は、「離婚すると、交友範囲が狭くなる」、「離婚は、恥ずかしいことである」、「離婚すると社会的信用を失う」など、離婚に対する忌避感、拒否的態度を示す項目からなるので、『離婚に対する否定的評価』と命名した。第4因子は、「離婚することで、人間的に成長する面があるだろう」、「離婚は人生の再出発である」など、離婚によるプラスの側面

について表しているので、『離婚による人間的成長』と命名した。第5因子は2項目しか高い負荷を示していないが、離婚増加の理由として女性が経済力を持ち自立したことが示されているので、『女性の経済的自立による離婚増加』と命名した。

## (2) 離婚に対する意識の尺度構成

因子分析の結果から、離婚に対する意識は『離婚する親への否定的イメージ』、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』、『離婚に対する否定的評価』、『離婚による人間的成長』、『女性の経済的自立による離婚の増加』の5側面から構成されていることが明らかになった。それぞれの側面について、 $\alpha$ 係数を算出したところ、『離婚する親への否定的イメージ』から順に、 $\alpha$ 係数は、.82、.79、.74、.52、.80であった。そこで、各因子に高く負荷する(.40以上)項目の回答を単純加算し、各尺度得点とした。いずれの尺度も、尺度得点が高いほど、離婚に対して当該の意識が高いことを示す。

各尺度得点の分布範囲と平均と標準偏差を図表 2.6 に示す。

図表 2.6 離婚に対する意識の各尺度得点の分布範囲と平均と標準偏差

尺度名	N	分布範囲	平均	標準偏差
離婚する親への否定的イメージ	638	11~44	27.32	6.69
離婚家庭の子どもへの否定的イメージ	647	5~20	10.59	3.31
離婚に対する否定的評価	640	7~28	12.11	3.60
離婚による人間的成長	646	4~16	11.36	2.19
女性の経済的自立による離婚増加	647	2~8	5.29	1.80

## (3) 下位側面別に見た性差

つぎに、各尺度得点の性差を検討するために、平均値の差の検定を行った。その結果を図表 2.7 に示す。有意水準 1% で、すべての下位尺度で有意差が認められ、『離婚する親への否定的イメージ』、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』、『離婚に対する否定的評価』の3尺度では、男子の方が女子よりも尺度得点が高く、『離婚による人間的成長』と『女性の経済的自立による離婚の増加』では、女子の方が男子よりも尺度得点が高かった。

以上より、男子は女子よりも、離婚および離婚家庭に対して抵抗感が強く否定的な意識が高いのに対して、女子は離婚を好意的にとらえ、離婚によるプラスの側面も認識していることが明らかになった。

図表 2.7 離婚に対する意識の各尺度得点に対する男女差の結果

尺度名		N	平均	標準偏差	t検定
離婚する親への否定的イメージ	男子	233	29.45	(6.83)	***
	女子	404	26.09	(6.31)	
離婚家庭の子どもへの否定的イメージ	男子	238	11.24	(3.39)	***
	女子	408	10.22	(3.21)	
離婚に対する否定的評価	男子	232	12.91	(4.07)	***
	女子	407	11.65	(3.22)	
離婚による人間的成長	男子	236	10.84	(2.26)	***
	女子	410	11.66	(2.10)	
女性の経済的自立による離婚増加	男子	237	4.85	(1.96)	***
	女子	409	5.56	(1.64)	

注: \*\*\*p<.001

### 第3節 結婚に対する意識

#### 1. 結婚に対する意識の実態

##### (1) 結婚に対する考え(Q1)

##### ① 結婚に対する考えの全体的傾向

9割前後の学生が、「今の世の中、結婚しなくても生きていける」と感じ、「女性にとっての幸せは、結婚することである」や「男性は結婚しないと、一人前とはいえない」という意見には反対していた。そして、7割前後の学生が、「結婚するのは、当たり前」とは思っておらず、「問題のある結婚生活なら、早く解消した方がいい」と感じていた。また、8割弱の学生が、「お金がなければ結婚生活は、うまくいかない」、「結婚する前に、相手の経済力を考える必要がある」と回答し、「愛さえあれば、結婚できる」という考えに反対している。さらに、結婚したら「多少の我慢が必要」、「配偶者と別に自分だけの人生の目標を持つべき」という意見に9割前後の学生が賛成していた。

以上のように、大学生は、結婚を人生の選択肢のひとつとして捉えており、結婚を絶対視していない。そして、結婚しないという生き方も認めている。また、結婚生活は愛情だけではうまくいかず、お金が必要と考え、多少の我慢は必要であるが、夫と妻がそれぞれ人生の目標を持つことも大切であると感じていた。

##### ② 結婚に対する考えにおける性差

男女別に見た結婚に対する考えの回答結果を図表 2.8 に示す。

図表 2.8 にみられるように、男子は女子に比べると、「生涯独身で過ごすのは好ましくない」、「結婚後は、夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」、「一度結婚したら、最後まで配偶者に添い遂げるべき」と強く感じていた。一方、女子は男子に比べると、「結婚生活に、多少の我慢は必要」、「結婚する前に、相手の経済力を考えることが必要」と強く考えていた。このように男子は女子よりも、結婚に対して保守的な意識が強く、他方、女子は男子よりも、結婚にはお金と忍耐が必要と認識していた。